ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド I, 5, 1—6, 3

湯田　豊

以下において，わたくしはブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，I, 5—23, および I, 6, 1—3 の二箇所を検討しよう。このウパニシャッドにおける I, 5, 1—13 は，生類の父プラジャーパティ (Prajāpati) によって 7 種類の食物が創造されることが説明される。7 種類の食物のなかでプラジャーパティが自己自身のために取って置くのは，マナス (manas), ヴァーチ (vāc), およびプラーナ (prāṇa) である。われわれのウパニシャッドは，7 種類の食物，特にマナス，ヴァーチ，およびプラーナについて心理的な説明をする——

I, 5, 1——yat saptānnāni medhayā tapasā 'janayat pitā |
ekam asya sādhāraṇaṃ dve devān abhājayat |
trīṇy ātmane ' kuruta paśubhya ekaṃ prāyacchat |
tasmin sarvaṃ pratiṣṭhitaṃ yac ca prāṇiti yac ca na |
kasmāt tāni na kṣīyante 'dyamānāni sarvadā |
yo vaitām akṣitiṃ veda so 'nnam atti pratīkena |
sa devān apigacchati sa ūrjam upajīvatīti ślokāḥ ||

タイッティリーヤ・ブラーフマナ，I, 3, 8, 1 には saptānnahomāñ juhoti | sapta vā annāni | という表現が見いだされる。Medhayā tapasā という文句については，特に問題はない。シャンカラの注釈によれば，medhā は prajñā, あるいは vijñāna, tapas は karman として解釈される。それゆえ，シャンカラによれば，medhā と tapas は jñānakarmaṇī である。Yo vaitām akṣitiṃ veda so 'nnam atti pratīkena という文句は，若干のコメントを必要とする。Akṣiti は，例えば，リグ・ヴェーダ，I, 40, 4 においては，sá dhatte ákṣiti śrávaḥ というふうに使用される。リグ・ヴェーダ，IX, 66, 7 においても同様である。そこでは，akṣiti は

dádhāno ákṣiti śravaḥ というふうに使用されている。Akṣiti śravaḥ は「不滅の名声」を意味する。リグ・ヴェーダの当該箇所においては，akṣiti は名詞であるというよりも，むしろ形容詞として用いられている。しかし，yo vaitām akṣitim veda という文句に関する限り，akṣiti は女性形の名詞の対格として使用されていることは明白である[1]。それは「不滅」，あるいは「無尽」を意味する。So 'nnam atti pratīkena を，ベートリンクは der verspeist die Speise mit dem Zugewandten Körpertheile，ドイッセンは Der isst Nahrung mit seinem Mund，スナールは Celui-là mange de la nourriture avec sa houche と訳している。しかるにマクス・ミュラーは，問題の箇所を he eats food with his face と訳している。もちろん，人は顔，あるいは面ではなく，口を以て食べる。それゆえ，論理的にはドイッセン，およびスナールの訳は正しい。けれども，*pratīka* は，第一義的には口ではなく顔を意味する。リグ・ヴェーダ，X, 11 8, 8 には，sá tvám agne prátīkena práty osha yātudhānyàḥ という文句が見いだされる。ここで使用されている pratīka は「顔」，あるいは「面」を意味する。

I, 5, 1 (訳)——父（＝プラジャーパティ）が知恵と苦行によって 7 種類の食物を生じた時，彼の（食物の）1 つは一切に共通であった。彼は 2 つを神々に配分した。彼は 3 つを自己のために定めた。家畜のために，彼は 1 つを与えた。それにおいて，呼吸するもの，および呼吸しないもののすべては基礎づけられている。それら（の食物）は常に食べられているのに，どうして尽きないのか？ 実に，これが尽きないことを知っている人は誰であろうと，彼は顔を以て食物を食べる。彼は神々に帰入し，食物によって生きる。

このような詩節 (śloka) がある。

I, 5, 2——yat saptānnāni medhayā tapasā 'janayat piteti medhayā hi tapasā 'janayat pitā | ekam asya sādhāraṇam itīdam evāsya tat sādhāraṇam annaṃ yad idam adyate | sa ya etad upāste na sa pāpmano vyāvartate miśraṃ hy etat | dve devān abhājayad iti hutañ ca prahutañ ca tasmād devebhyo juhvati ca pra ca juhvaty

atho āhur darśa-pūrṇamāsāv iti | tasmān neṣṭi-yājukaḥ syāt | paśubhya ekaṃ prāyacchad it tat payaḥ | payo hy evāgre manuṣyāś ca paśavaś copajīvanti tasmāt kumāraṃ jātaṃ ghṛtaṃ vaivāgre pratilehayanti stanaṃ vā 'nudhāpayanty atha vatsaṃ jātam āhus atṛnāda iti | tasmin sarvaṃ pratiṣṭhitaṃ yac ca prāṇiti yac ca neti payasi hīdaṃ sarvaṃ pratiṣṭhitaṃ yac ca prāṇiti yac ca na | tad yad idam āhuḥ saṃvatsaraṃ payasā juhvad apa punar-mṛtyuṃ jayatīti na tathā vidyād yad ahar eva juhoti tad ahaḥ punar-mṛtyum apa jayaty evaṃ vidvān sarvaṃ hi devebhyo 'nnādyaṃ prayacchati | kasmāt tāni na kṣīyante 'dyamānāni sarvadeti puruṣo vā akṣitiḥ sa hīdam annaṃ punaḥ punar janayate | yo vaitām akṣitiṃ vedeti puruṣo vā akṣitiḥ sa hīdam annaṃ dhiyā dhiyā janayate karmabhir yad dhaitan na kuryāt kṣīyate ha so 'nnam atti pratīkeneti mukhaṃ pratīkaṃ mukhenety etat | sa devān apigacchati sa ūrjam upajīvatīti praśaṃsā ||

I, 5, 2 は，すでに述べられた詩節 (śloka) に対する説明である。Sa ya etad *upāste* na sa pāpmano vyāvartate という文において，*upās* をベートリンクは verehren，マクス・ミュラーは worship と訳している。すでに述べたように，わたくしはシャイエルに従って，*upās* を「熱心に求める」と訳すのがよいと考える。しかるにスナールは，問題の箇所を celui qui *croit* à cette nourriture ne s'affranchit pas du mal，ドイッセンは wer diese *hochschätzt*, der wird nicht von dem Übel befreit と訳している。ドイッセンの訳は，あまりにも恣意的である。Sa ya etad *upāste* na sa pāpmano vyāvartate を，わたくしは「これ (食物) を熱心に求める人は，悪を免れない」と訳すのが正しいと思う。シャンカラは，この upāste を tatparo bhavati と注釈している。Tatpara は，それ (＝食物) を最高のものとしてもっている，という意味であり，その限りでは特に異論はない。しかし upās の対象は，ウパニシャッドにおいては人間ではなく，事物である。しかるにシャンカラは，upās の対象を人間とみなし，次のように注釈している——upāsanaṃ hi nāma tātparyaṃ dṛṣṭaṃ loke gurum upāste rājānam upāsta ity ādau | tasmāc charīra-sthity-arthān-

nopabhoga-pradhāno nādṛṣṭārtha-karma-pradhāna ity arthaḥ | sa evaṃbhūto na pāpmano 'dharmād vyāvartate na vimucyata ity arthaḥ | しかしウパニシャッドにおいては，人は師を崇拝する，あるいは王を崇拝するという言語表現は存在しない。重ねて言えば，Upās の対象は人間ではなく事物である。食物を崇拝するということは，ナンセンスである。もしも upās が「近づく」ことを意味するとすれば，ある事物を獲得しようとして人は事物に近づくのであって，彼はその事物——例えば食物——を崇拝しようなどという意図は有しない。

Hutañ ca prahutañ ca という文句に関して，シャンカラは hutam ity agnau havanam | prahutaṃ hutvā baliharaṇam と注釈している。Huta というのは火のなかに注がれた供物のことであり，prahuta というのはその後に供物を捧げることである。Huta および prahuta の2つは，神々に捧げられた2種類の食物であると言われる。しかし，この2つは新月祭，および満月祭の二つである，と言う人々もいる。Tasmān neṣṭi-yājukaḥ syāt——iṣṭi-yājuka を，シャンカラは iṣṭi-yajana-śīlaḥ と注釈している。Iṣṭi という語は，ここでは kāmyeṣṭi を意味する。kāmyeṣṭi は，特定の願望を成就するために行なわれる祭祀である。このような iṣṭi については，シャタパタ・ブラーフマナ，I, 3, 5, 10 に簡単な説明がある。祭祀との関連において特に注目に値するのは，punar-mṛtyu である。Punar-mṛtyu (再死) に関して，シャンカラは次のように注釈している——tad ucyate 'pajayati punar-mṛtyuṃ punar-maraṇaṃ sakṛn mṛtvā vidvāñ charīreṇa viyujya sarvātmā bhavati na punar-maraṇāya paricchinnaṃ śarīraṃ gṛhṇātīty arthaḥ | ジャイミニーヤ・ブラーフマナ，I, 6 には，etau punar-mṛtyū atimucyate yad ahorātre という記述が見られる。Punar-mṛtyu という語は，ブリハッド・アーラニヤカ・カウパニシャッド，I, 2, 7; III, 2, 10; III, 3, 2 にも現われる。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド，III, 35, 8 には，ati punar-mṛtyuṃ tarati ya evaṃ veda という文句が見いだされる。Punar-mṛtyu の思想は，ブラーフマナにおいて特に顕著である。

I, 5, 2 (訳)——「父が知恵と苦行によって7種類の食物を生じた時」と言われる。なぜなら，父は知恵と苦行によって（それらの食物を）生じ

たからである。

「彼の（食物）の 1 つは一切に共通であった」と言われる。ここで食べられる彼の食物は，一切に共通であった。これ（この食物）を熱心に求める人は誰であろうと，悪を免れない。なぜなら，これは（選別されずに）混ざっているからである。

「彼は 2 つを神々に配分した」と言われる。それは，火のなかに注がれたもの（*huta*），および供犠の際に捧げられたもの（*prahuta*）である。それゆえ，人は神々のために火のなかに注ぎ，供犠の際に捧げる。しかし，それは新月祭，および満月祭である，と人々は言う。それゆえ，人はイシティ（Iṣṭi）という名の特殊の願望成就の祭祀を行なうべきではない。

「家畜のために，彼は 1 つを与えた」と言われる。すなわち，それは乳である。なぜなら，最初，人間および家畜は乳によって生きるからである。それゆえ，子供が生まれるや否や，人々は最初溶かしバターをなめさせ，あるいは乳房を吸わせる。

しかし，子牛が生まれるや否や，それはまだ草を食わない，と人々は言う。「そこにおいて，呼吸するもの，および呼吸しないもののすべては基礎づけられている」と言われる。なぜなら，呼吸するもの，および呼吸しないものという，この一切は乳において基礎づけられているからである。

もしも，人が一年間火のなかに乳を注げば，彼は再死を避ける，とこのように言うならば，人はそのように知るべきではない。まさに彼が火のなかに注ぐその同じ日に，このように知っている人は再死を避ける。なぜなら，彼は神々に対して全滋養物を与えるからである。「それら（の食物）は常に食べられているのに，どうして尽きないのか？」と言われるならば，（われわれは次のように答える）

実に，不滅なのは人間（プルシャ）である。なぜなら，彼は再三再四この食物を生じるからである。「実に，これが尽きないことを知っている人は誰であろう」と言われる時には，実に，尽きないのは人間であるということが意味されている。なぜなら，彼は繰り返し繰り返し熟慮することによって，行為を通じてこの食物を生じるからである。もしも彼がこれを行なわなければ，それ（食物）は尽きるであろう。「彼は顔を以て食物を食べる」と言われる時，顔（pratīka）は口である。彼は，

口によって，これを食べる。「彼は神々に帰入し，食物によって生きる」という文句は，讃辞を含む。

I, 5, 3——trīṇy ātmane 'kuruteti mano vācaṃ prāṇaṃ tāny ātmane 'kurutānyatra-manā abhūvaṃ nādarśam anya-manā abhūvaṃ nāśrauṣam iti manasā hy eva paśyati manasā śṛṇoti | kāmaḥ saṅkalpo vicikitsā śraddhā 'sraddhā dhṛtir adhṛtir hrīr dhīr bhīr ity etat sarvaṃ mana eva tasmād api pṛṣṭhata upaspṛṣṭo manasā vijānāti yaḥ kaś ca śabdo vāg eva sā | eṣā hy antam āyattaiṣā hi na prāṇo 'pāno vyāna udānaḥ samāno 'na ity etat sarvaṃ prāṇa evaitanmayo vā ayam ātmā vāṅmayo manomayaḥ prāṇamayaḥ ||

Trīṇy *ātmane* 'kuruta という文句において，アートマンは単なる自己である。それは父としてのプランジャーパティ自身を指し示す。Trīṇy ātmane 'kuruteti という文句に関して，シャンカラは次のように注釈している——ko 'syārtha ity ucyate | manovākprāṇā etāni trīny annāni tāni mano vācaṃ prāṇam cātmana ātmārtham akuruta kṛtavān sṛṣṭvādau pitā | ここで，わたくしは創造者としての父が自己のために，心 (manas)，言葉 (vāc)，および息 (prāṇa) の3つを保留したことを再確認しなければならない。Anyatra-manā は，anyatra-manas の単数1格・男性形である。Manas はリグ・ヴェーダ，およびブラーフマナにおいても重要な概念である。リグ・ヴェーダにおいては，manas は der Geist als Sitz von Denken und Erkennen, von Wunsch und Wille, Freude und Furcht である[2)]。ブラーフマナ文献においては，manas は心臓のなかに基礎づけられている，という記述も見いだされる。マナスは，リグ・ヴェーダ以来，考えるという機能をもつだけでなく，感じたり，あるいは欲したりする機能も備えている。しかし manas に関する限り，思考の機能は特に重視されねばならない。

さて，シャンカラは manas を内官 (antaḥkaraṇa) として解釈する。シャンカラによれば，まず最初に，耳などの外官と異なった心 (manas) が存在する——tāvan manaḥ śrotrādi-bāhyakaraṇa-vyatiriktam | シャンカラは続けて次のように言う——次のように熟知されているからであ

る (yata evaṃ prasiddham)，と。たとい外官，対象，およびアートマン(自己)の関係が存在しても，眼前の対象を彼は認識しない (bāhyakaraṇa-viṣayātma-saṃbandhe saty apy abhimukhībhūtaṃ viṣayaṃ na gṛhṇāti)。もしも彼が，「あなたはこの形態を見たか？」と言われれば，彼は次のように言う——「わたくしの心は何処か他のところにあった，つまり，わたくしは放心していていた。わたくしは見なかった」(kiṃ dṛṣṭavān āsīdaṃ rūpam ity ukto vadaty anyatra me gataṃ mana āsīt so 'ham anyatra-manā āsaṃ nādarśam |) 同様に，「あなたはわたくしのこの言葉を聞いたか?」と言われれば，彼は次のように言う——「わたくしの心は何処か他のところにあった。わたくしはそれを聞かなかった」と (tathedaṃ śrutavān asi madīyaṃ vaca ity ukto 'nyatra-manā abhūvaṃ nāśrauṣaṃ na śrutavān asmīti |)。それゆえ，それ(心)が近くになければ(現存していなければ)，眼などには形態などを認識する能力が備わっているとしても，それぞれの対象と結合している際でも，眼などには形態，および言葉などの認識は存在しない (tasmād yasyāsannidhau rūpādi-grahaṇa-samarthāsyāpi sataś cakṣurādeḥ svasva-viṣaya-saṃbandhe rūpaśabdādi-jñānaṃ na bhavati |)。しかし，その状態が存在する場合には，他のもの，すなわち，心と名づけられる内官がすべての器官と対象と結びつけられたものとして理解される (yasya ca bhāve bhavati tad anyad asti mano nāmāntaḥkaraṇaṃ sarva-karaṇa-viṣaya-yogīty avagamyate |)。それゆえ，全世界の人々は実に心によって見，実に心によって聞くからである。それ（心）が散乱している時には，見ることなどは存在しないからである (tasmāt sarvo hi loko manasā hy eva paśyati manasā śṛṇoti tad vyagratve darśanādy abhāvāt |)。

Manasā hy eva paśyati manasā śṛṇoti という文句は，マイトラーヤナ・ウパニシャッド，6，30 にも見いだされる。

マナス (manas)，およびヴァーチ (vāc) と並人で重要なのは，ここではプラーナ (prāṇa) である。プラーナは，普通，インド哲学において「五気」，あるいは「五つの生気」と称せられる。五気とは，prāṇa (プラーナ)，apāna (アパーナ)，samāna (サマーナ)，udāna (ウダーナ)，および vyāna (ヴィヤーナ) のことである。シャンカラは，五気について詳細な注釈を施している[3]。しかし，ここでは五気についてスケッチするにとど

めよう。Prāṇa は心臓のなかの息，胸の息である。Apāna は肛門の息，samāna はヘソの息，udāna はノドの息，vyāna は全身に広がっている息である。

そして，息の説明を終えた直後に，われわれのウパニシャッドは，突然，etanmayo vā ayam ātmā vāṅmayo manomayaḥ prāṇamayaḥ と宣言する。このアートマン (ayam ātman) が何を意味するかは，かならずしも明らかではない。しかし，ともかく，われわれはアートマンが言葉，心，および息の3つから成ることを見てとる。もしも，このアートマンが世界創造者である父，あるいはプラジャーパティであるとすれば，この父は3重の食物——言葉・心・息——から構成されているということになるであろう。

I, 5, 3 (訳)——「彼は3つを自己のために定めた」と言われる時，心，言葉，および息が意味されている。彼は，それらを自己のために定めた。「わたくしの心は何処か他のところにあった。わたくしは，それを見なかった。わたくしの心は何処か他のところにあった。わたくしは，それを聞かなかった」と，人は言う。なぜなら，わたくしは心によって聞くからである。

欲望，決心，疑惑，信仰，不信仰，堅固，非堅固，恥，熟慮，恐怖——このすべては，心にほかならない。それゆえ，背後から触れられる時でさえ，人は心によってそれを認識する。

どんな音でも，それは言葉にほかならない。なぜなら，それは終わりに達するから。なぜなら，それは終わりに達しないから。プラーナ（吸気），アパーナ(呼気)，ヴィヤーナ（媒気），ウダーナ（上気），サマーナ(等気)という息——このすべては，息にほかならない。実に，このアートマンは，言葉から構成され，心から構成され，息から構成されている。

I, 5, 4——trayo lokā eta eva vāg evāyaṃ loko mano 'ntarikṣa-lokaḥ prāṇo 'sau lokaḥ ||

I, 5, 4 (訳)——まさに，これら（の3つ）は三界である。この世界（地界）は，言葉にほかならない。空界は，心である。あの世界（天界）は，

息である。

I, 5, 5——trayo vedā eta eva vāg evarg-vedo mano yajur-vedaḥ prāṇa sāma-vedaḥ ||

I, 5, 5 (訳)——まさに，これら（の3つ）は3ヴェーダである。リグ・ヴェーダは，言葉にほかならない。ヤジュル・ヴェーダは，心である。サーマ・ヴェーダは，息である。

I, 5, 6——devāḥ pitaro manuṣyā eta eva vāg eva devā manaḥ pitaraḥ prāṇo manuṣyāḥ ||

I, 5, 6 (訳)——まさに，これら（の3つ）は神々，祖父，および人間である。神々は，言葉にほかならない。祖父は，心である。人間は，息である。

I, 5, 7——pitā mātā prajaita eva mana eva pitā vāṅ mātā prāṇaḥ prajā ||

I, 5, 7 (訳)——まさに，これら（の3つ）は父，母，および子孫である。父は心であり，母は言葉であり，子孫は息である[4]。

I, 5, 8——vijñātaṃ vijijñāsyam avijñātam eta eva yat kiñ ca vijñātaṃ vācas tad-rūpaṃ vāg ghi viñātā vāg enaṃ tad bhūtvā 'vati ||

I, 5, 8 (訳)——まさに，これら（の3つ）は認識されているもの，認識されるべきもの，および認識されていないものである。およそ認識されているものは，言葉の形態である。なぜなら，言葉は認識されているから。それになって，言葉はこの人を保護する。

I, 5, 9——yat kiñ ca vijijñāsyaṃ manasas tad-rūpaṃ mano hi

vijijñāsyaṃ mana enaṃ tad bhūtva 'vati ||

I, 5, 9 (訳)——およそ認識されるべきものは，心の形態である。なぜなら，心は認識されるべきものであるから。それになって，心はこの人を保護する。

I, 5, 10——yat kiñ cāvijñātaṃ prāṇasya tad-rūpaṃ prāṇo hy avijñātaḥ prāṇa enaṃ tad bhūtvā 'vati ||

I, 5, 10 (訳)——およそ認識されていないものは，息の形態である。なぜなら，息は認識されていないから。それになって，息はこの人を保護する。

I, 5, 11——tasyai vācaḥ pṛthivī śarīraṃ jyotīrūpam ayam agnis tad yāvaty eva vāk tāvatī pṛthivī tāvān ayam agniḥ ||

I, 5, 11 (訳)——この言葉の身体は，大地である。この（地上の）火——それは，それの光としての現象形態である。それゆえ，言葉の広がる限り，大地の広がる限り，この（地上の）火は広がる。

I, 5, 12——athaitasya manaso dyauḥ śarīraṃ jyotīrūpam asāv ādityas tad yāvad eva manas tāvatī dyaus tāvān asāv ādityas tau mithunaṃ samaitāṃ tataḥ prāṇo 'jāyata sa indraḥ sa eṣo 'sapatno dvitīyo vai sapatno nāsya sapatno bhavati ya evaṃ veda ||

I, 5, 12 (訳)——しかるに天は，この心の身体である。あの太陽——それは，（それの）光としての現象形態である。それゆえ，心の広がる限り，その限り天が広がり，その限り，あの太陽が広がっている。（言葉と心の）2つが交接した時，それから息が生じた。それが，インドラである。これは，競争者を有しない。実に第二者が，競争者である。このように知っている人には，競争者は存在しない。

I, 5, 13——athaitasya prāṇasyā 'paḥśarīraṃ jyotīrūpam asau candras tad yāvān eva prāṇas tāvatya āpas tāvān asau candras ete sarva eva samāḥ sarve 'nantāḥ sa yo haitān antavata upāste 'ntavantaṃ sa lokaṃ jayaty atha yo haitān anantān upāste 'nantaṃ as lokaṃ jayati ||

わたくしの使用したインド版には，athaitasya prāṇasya 'paḥśarīraṃ とある。しかし，'paḥśarīraṃ は，もちろん，'paḥ śarīraṃ と読むべきである。Āpaḥ (水) が世界創造の原理であるという思想は，リグ・ヴェーダ以来，われわれに知られている。しかし，この箇所においては水はこの息の身体とみなされている。そして，あの月はそれの光としての現象形態である。そして，「これらのすべて」(ete sarva eva) は等しい，とこのようにわれわれのテキストは読む。そして全世界は，自己に関しても，あるいは自然現象に関しても，等しく言葉・心・息の3つによって満たされている。このようにシャンカラは注釈している。シャンカラ自身は，次のように言っている——samastāni tv etāni prajāpatis te ete vāṅmanaḥprāṇāḥ sarve eva samās tulyā vyāptimanto yāvat prāṇigocaraṃ sādhyātmādhibhūtaṃ vyāpya vyavasthitāḥ |

Sa yo haitān antavata *upāste* 'ntavantaṃ sa lokaṃ jayaty atha yo haitām anantan *upāste* 'nantaṃ sa lokaṃ jayati という文に関する限り，問題なのは *upāste* の語義である。ここでは，わたくしは *upās* の対象が人間ではなく事物であることを，従ってウパースには崇拝の意味が存在しないことを指摘するにとどめよう。*Upās* については，言語的な再検討が必要である。

I, 5, 13 (訳)——しかるに，水はこの息の身体である。あの月——それは，(それの) 光としての現象形態である。それゆえ，息の広がる限り，その限り，水が広がり，その限り，あの月が広がっている。これらすべては等しく，すべては無限である。これらのものを有限なものとして熱心に求める人は，有限な世界を獲得する。しかるに，これらのものを無限なものとして熱心に求める人は，無限の世界を獲得する。

I, 5, 14——sa eṣa saṃvatsaraḥ prajāpatiḥ ṣoḍaśa-kalas tasya rātraya eva pañcadaśa kalā dhruvaivāsya ṣoḍaśī kalā sa rātribhir evā ca pūryate 'pa ca kṣīyate so 'māvāsyāṃ rātrim etayā ṣoḍaśyā kalayā sarvam idaṃ prāṇabhṛd anupraviśya tataḥ prātar jāyate tasmād etāṃ rātriṃ prāṇabhṛtaḥ prāṇaṃ na vicchindyād api kṛkalāsasyaitasyā eva devatāyā apacityai ||

ブラーフマナ文献においては，プラジャーパティは実に種々のものと同一視される。ここでは，プラジャーパティは歳であると言われる——sa eṣa saṃvatsaraḥ prajāpatiḥ ṣoḍaśa-kalas. アイタレーヤ・ブラーフマナ，7, 7, 2 には，saṃvatsaraḥ prajāpatiḥ という記述がある。シャタパタ・ブラーフマナ，I, 2, 5, 13 には，saṃvatsaro yajñaḥ prajāpatiḥ と述べられている。Ṣoḍaśa-kalas という言葉は，わたくしにシャタパタ・ブラーフマナ，X, 4, 1, 17 の文句を思い出させる。このブラーフマナのこの箇所によれば，プラジャーパティには毛髪から始まって髄に終わる 16 の部分 (ṣoḍaśa kalā) が存在する。そして，それらの部分の間を満たす息は 17 の部分から構成されるプラジャーパティである (saptadaśaḥ prajāpatiḥ) である。しかし，われわれが今扱っている ṣoḍaśa-kala は，プラジャーパティの身体の部分とは無関係である。それは，歳ないし歳を本質とする時間と関係がある。シャンカラは，ṣoḍaśa-kala について，次のように注釈している——ṣoḍaśa-kalaḥ ṣoḍaśa kalā avayavā asya so 'yaṃ ṣoḍaśa-kalaḥ saṃvatsaraḥ saṃvatsarātmā kāla-rūpaḥ | tasya ca kālātmanaḥ prajāpate rātraya evāhorātrāṇi tithaya ity arthaḥ | 16 の部分は，15 の部分 (pañcadaśa kalā)，および第 16 の部分 (ṣoḍaśī kalā) の 2 つに分けられる。そして，プラジャーパティの 15 の部分は夜であり，それの第 16 の部分は永続的な部分である。プラジャーパティの ṣodasī kalā は不変的な要素である。

I, 5, 14 (訳)——歳であるこのプラジャーパティは，16 の部分を有する。彼の 15 の部分は，夜にほかならない。彼の第 16 の部分は，永続的である。(月としての) 彼 (＝プラジャーパティ) は，夜によってのみ満ち，そして，かける。新月の夜，この第 16 の部分とともに，ここ

で生命を保っているすべてのもののなかに入った後に，それから翌朝，彼は生まれる。それゆえ，この神格に敬意を表するために，たとい一匹のトカゲの生命でさえ，生命を保っているものの生命を，この夜，人は断つべきではない。

I, 5, 15——yo vai sa saṃvatsaraḥ prajāpatiḥ ṣoḍaśa-kalo 'yam eva sa yo 'yam evaṃvid puruṣas tasya vittam eva pañcadaśa kalā ātmaivāsya ṣoḍaśī kalā sa vittenaivā ca pūryate 'pa ca kṣīyate tad etan nabhyaṃ yad ayam ātmā pradhir vittaṃ tasmād yady api sarva-jyāniṃ jīyata ātmanā cej jīvati pradhinā 'gād ity evāhuḥ ||

上のテキストに関して，言語的に注目に値するのは，sarva-jyāniṃ jīyate という表現である。Jīyate は *jya* (第九類の動詞) の受動態である。従って，jīyate は目的を取らないはずである。しかるに，sarva-jyāniṃ は jīyate の同族目的語 (cognate object) である。シャンカラは，sarva-jyāniṃ jīyate に関して次のように注釈している——sarva-jyāniṃ sarva-svāpaharaṇaṃ jīyate hīyate glāniṃ prāproti と。なお，agād (=agāt) は，*gā* (第 3 類の動詞。jigāti) のアオリストである。Gā は，行く，・・・の状態になる，追う，尽きる，終わる，という意味である。シャンカラは，agāt. について次のように注釈している——agāt kṣīṇo 'yam と。

I, 5, 15 (訳)——実に，歳であるプラジャーパティは，このように知っている人間にほかならない。15 の部分は，彼の財産にほかならない。第 16 の部分は，彼のアートマン (自己) にほかならない。財産によってのみ，彼は満ち，そして，かける。このアートマン (自己) であるものは，(車輪の) こしきである。財産は，輪縁である。それゆえ，人が一切を失うとしても，もしも人がアートマンによって生きるならば，「彼は輪縁を失った」と，人々は言う。

I, 5, 16——atha trayo vāva lokā manuṣya-lokaḥ pitṛ-loko deva-loka iti so 'yaṃ manuṣya-lokaḥ putreṇaiva jayyo nānyena karmaṇā

karmaṇā pitṛ-loko vidyayā deva-loko deva-loko vai lokānāṃ śreṣṭhas tasmād vidyāṃ praśaṃsanti ||

I, 5, 16 (訳)——さて，人間の世界，祖父の世界，神々の世界という，実に3つの世界が存在する。この人間の世界は，息子によって獲得されるべきであり，他の行為によって獲得されるべきではない。祖父の世界は祭祀の行為によって，神々の世界は知識によって獲得されるべきである。実に神々の世界は，諸世界のなかで最良である。それゆえ，人々は知識を称讃する。

I, 5, 17——athātaḥ saṃprattir yadā praiṣyan manyate 'tha putram āha tvaṃ brahma tvaṃ yajñas tvaṃ loka iti sa putraḥ pratyāhāhaṃ brahmāhaṃ yajño 'haṃ loka iti yad vai kiṃ cānūktaṃ tasya sarvasya brahmety ekatā | ye vai ke ca yajñās teṣāṃ sarveṣāṃ yajña ity ekatā ye vai ke ca lokās teṣāṃ sarveṣāṃ loka ity ekataitāvad vā idaṃ sarvam etan mā sarvaṃ sann ayam ito 'bhunajad iti tasmāt putram anuśiṣṭaṃ lokyam āhus tasmād enam anuśāsati sa yadaivaṃvid asmāl lokāt praity athaibhir eva prāṇaiḥ saha putram āviśati | sa yady anena kiṃcid akṣṇayā 'kṛtaṃ bhavati tasmād enaṃ sarvasmāt putro muñcati tasmāt putro nāma sa putreṇaivāsmil loke pratitiṣṭhaty athainam ete daivāḥ prāṇā amṛtā āviśanti ||

Saṃpratti という語に酷似しているのは，saṃpradāna である。カウシータキ・ウパニシャッド，2，15 には athātaḥ pitāputrīyaṃ *saṃpradānam* iti･･･という文句が見いだされる。カウシータキのこの文句と，われわれのウパニシャッドの文句 (athātaḥ *saṃprattir*) とは，完全に対応する。シャンカラは，この点に関して次のように注釈している——putre hi svātma-vyāpāra-saṃpradānaṃ karoty anena prakāreṇa pitā, と。ここでわたくしの興味をそそるのは，*tvaṃ brahma* という表現である。しかし，われわれはこの文句と同時に，tvaṃ yajñas tvaṃ loka iti という表現にも注意を払う必要がある。しかし，ここでブラフマンと呼ばれるもの

は，何を指すのであろうか？ この点に関連して，われわれのウパニシャッドは次のように言う——yad vai kiṃ cānūktaṃ tasya sarvasya brahmety ekatā，と。ベートリンクは，このテキストを Alles, was gelernt worden ist, wird einheitlich als das Brahman zusammengefasst と訳している．スナールはこの文句を，Tout cequi se récite est compris dans «*brahman*» と訳した。ドイッセンは brahman を das Gebet と訳し，次のように翻訳している——Nämlich, alles was [im Veda] studiert worden ist, das wird zusammengefasst in das Wort „Gebet" (*brahman*)，と。ヒュームによれば，brahman は holy knowledge である。いずれにせよ，この箇所で意味されているブラフマンは，バラモン神学の中心的な概念を代表するものと考えていい。

Etan mā sarvaṃ sann ayam ito 'bhunajad iti という文句に関連して，われわれは sarvaṃ sannayam ito 'bhunajad というふうに読むことが出来ないわけではない。その場合には，sannayam は saṃnayam と読まれるべきであろう。しかし，このような解読は，あまりにも技巧的である。Ito 'bhunajat をベートリンクは bhunajat と訂正している。*Bhuj* は第7類の動詞であり，それの Parasmaipada の形態 (3人称・単数・現在) は bhunakti である。*Bhunajat* は，それの subjanctive である。わたくし自身は，ベートリンクの解読に従うこととする。Tasmāt putram anuśiṣṭaṃ lokyam āhuḥ というテキスは，言語的には難解ではない。ここで検討に値するのは，putra (息子) の語源解釈である。以下において，われわれは息子と父の間の saṃpratti を検討しなければならない。そのためにも，putra について言及する必要がある。ゴーパタ・ブラーフマナ，1，1，2 には次のような記述が見いだされる——punnāma narakam··· tasmāt trāti putras tat putrasya putratvaṃ | Put という名の地獄から trā (救出する) というのが，putra の通俗語源解釈である。マヌの法典，IX, 138 には，次のような記述がある——punnāmno narakād yasmāt trāyate pitaraṃ sutaḥ || tasmāt putra iti proktaḥ svayam eva svayaṃbhuvā || しかるにシャンカラは，父によって残された穴を埋める救済者が息子である，というふうに注釈している——idaṃ tat putrasya putratvaṃ yat pitṛcchidraṃ pūra pūrayitvā trāyate | このような putra (put-tra) の語源解釈を知っていれば，tasmād enaṃ sarvasmāt

putro muñcati tasmāt putro nāma という文句は，容易に理解することが出来るであろう。

I, 5, 17 (訳)——さて，これから遺贈が行なわれる。自分はまさに死のうとしている，と人が考える時，彼は息子に次のように言う——「お前はブラフマンである，お前は祭祀である，お前は世界である」と。息子は答える——「わたくしはブラフマンである，わたくしは祭祀である，わたくしは世界である」と。

実に，およそヴェーダの学習のすべては，「ブラフマン」という語の下に統一的に含まれる。そして実に，およそ祭祀のすべては，「祭祀」という語の下に統一的に含まれる。そして実に，およそ世界のすべては，「世界」という語の下に統一的に含まれる。実に，この一切はそれだけである。「このもの（息子）は一切であるから，この世界から彼はわたくしの役に立つように」と，(父は考える)。それゆえ，人々は教えられている息子のことを，彼は世界を獲得するものである，と言う。それゆえ，人は彼に教える。このように知っている人がこの世を去る時には，彼はこれらの生気とともに息子のなかに入る。彼によって何かあることが誤ってなされたとしても，息子は彼をその一切から解放する。それゆえ，彼は息子であると言われる。彼は息子によってのみ，この世において基礎づけられている。それから，これらの神的な，不死の諸生気（言葉，心，および息）は，彼のなかに入る。

I, 5, 18——**pṛthivyai cainam agneś ca daivī vāg āviśati sā vai daivī vāg yayā yad yad eva vadati tat tad bhavati ||**

Pṛthivyai は，pṛthivī の dative singular feminine である。しかし，ここでは，pṛthivyai は ablative として使用されている。神的な言葉に関して，シャンカラは次のように注釈している——**amoghā 'pratibaddhā 'sya vāg bhavati,** と。神的な言葉を用いて語れば，人が何を語ろうと，彼の語ることはかならず実現される，ということがここで意味されている。

I, 5, 18 (訳)——大地から，そして火から，神的な言葉は彼のなかに入

る。実に，言葉は神的である。それによって彼が語ることが何であれ，そのことは実現される。

I, 5, 19——divaś cainam ādityāc ca daivaṃ mana āviśati tad dha daivaṃ mano yenānandy eva bhavaty atho na śocati ||

I, 5, 19 (訳)——天から，そして太陽から，神的な心は彼のなかに入る。実に，心は神的である。それによって，人は歓喜に満ち，悲しむこともない。

I, 5, 20——adbhyaś cainaṃ candamasaś ca daivaḥ prāṇa āviśati sa vai daivaḥ prāṇo yaḥ saṃcaraṃś cāsaṃcaraṃś ca no vyathate 'tho na riṣyati sa evaṃvit sarveṣāṃ bhūtānām ātmā bhavati yathiṣā devataivaṃ sa yathaitāṃ devatāṃ sarvāṇi bhūtāny avanty evaṃ haivaṃvidaṃ sarvāṇi bhūtāny avanti | yad u kiñ cemāḥ prajāḥ śocanty amaivāsāṃ tad bhavati puṇyam evāmuṃ gacchati na ha vai devān pāpaṃ gacchanti ||

I, 5, 20 (訳)——水中から，そして月から，神的な息は，彼のなかに入る。実に神的な息は，動いていても，あるいは動いていなくても，揺らめかず，傷つけられもしない。このように知っている人は，すべての存在の自己（アートマン）になる。彼は，この神格と同様である。すべての存在がこの神格を保護するように，このようにすべての存在はこのように知っている人を保護する。そして，これらの生類が悲しんでいるものが何であれ，それは彼らの許にとどまる。善だけが，彼の許に行く。実に，悪は神々の許には行かない。

I, 5, 21——athāto vrata-mīmāṃsā prajāpatir ha karmāṇi sasṛje tāni sṛṣṭāny anyonyenāspardhanta vadiṣyāmy evāham iti vāg dadhre drakṣyāmy aham iti caksuḥ śroṣyāmy aham iti śrotram evam anyāni karmāṇi yathākarma tāni mṛtyuḥ śramo bhūtvopayeme tāny āpnot tāny āptvā mṛtyur avārundha tasmāc chrāmyaty

eva vāk śrāmyati cakṣuḥ śrāmyati śrotram athemam eva nāpnod yo yaṃ madhyamaḥ prāṇas tāni jñātuṃ dadhrire | ayaṃ vai naḥ śreṣṭho yaḥ saṃcaraṃś cāsaṃcaraṃś ca na vyathate 'tho na riṣyati hantāsyaiva sarve rūpam asāmeti ta etasyaiva sarve rūpam abhavaṃs tasmād eta etenākhyāyante prāṇā iti tena ha vāva tat kulam ācakṣate yasmin kule bhavati ya evaṃ veda ya u haivaṃ-vidā spardhate 'nuśuṣyaty anuśuṣya haivāntato mriyata ity adhyātmam ||

Vrata-mīmāṃsā について，シャンカラは upāsanakarma-vicāraṇa という意味であると注釈している。わたくしは，vrata をここで「誓い」と訳したいと思う。「誓い」の mīmāṃsā が，以下において話題になっている。Mimāṃsa をシャンカラは vicāraṇa と注釈している。Vrata-mīmāṃsā は，「誓いの論究」である。ちなみに vrata-mīmāṃsā をスナールは la méditation des pratiques と訳している。しかるにベートリンクは die Abwägung der Obervanzen，ドイッセンは die *Betrachtung des Gelübdes*，マクス・ミュラーは the consideration of the observances (acts)，ヒュームは *a consideration of the Activities* と訳している。

Prajāpatir ha karmāṇi sasṛje という文句において，karmāṇi は何を指し示すのであろうか？ Karman は行為を意味する。それゆえ，スナールはここの箇所を Prajāpati avait produit les actes と訳している。ドイッセンは karmāṇi を Verrichtungen，ミュラーは the actions と訳した。しかるにベートリンクは karmāṇi を die Sinnesorgane と訳している。シャンカラはこの点に関して，次のように注釈している——karmāṇi karaṇāni vāg-ādīni karmārthāni··· シャンカラによれば，karman はここでは言葉などの感覚器官を指すのである。わたくしは，ここではシャンカラの注釈に従い，ベートリンクの訳を踏襲した。

Tāni mṛtyuḥ śramo bhūt*vopayeme* tāny āpnot という文に関して，*upayeme* に言及しよう。*Upayeme* は upa＋yeme である。*Yeme* は yam (第1類の動詞) の完了形 (Ātmanepada，3人称・単数) である。Yeme については，文法的に特に問題はない。ここでわれわれが注意しなければならないのは，madhyamaḥ prāṇaḥ という表現である。Madhyama の

同義語としてウパニシャッド文献において使用されている語は，mukhya および āsanya である。この madhyamaḥ prāṇāḥ に関連して，ayaṃ vai naḥ śreṣṭho yaḥ saṃcaraṃś cāsaṃcaraṃs ca na vyathate 'tho na riṣyati という表現が見られる。しかし，この表現は I, 5, 20 における sa vai daivaḥ prāṇo yaḥ saṃcaraṃś cāsaṃcaraṃś ca no vyathate 'tho na riṣyati という表現と合致する。そしてシャンカラは，この madhyama prāṇa をアートマンとして理解する。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，3, 9, 26 には，あの有名なネーティ・ネーティのアートマンが説かれている。このアートマンに関して特にわたくしの興味をそそるのは，このアートマンに関してヤージニャヴアルキヤが na vyathate na riṣyati と記述していることである。ネーティ・ネーティのアートンと息，あるいは madhyama prāṇa との関連は否定出来ない事実である。

Ya u *haivaṃvidā* spardhate 'nuśuṣyaty anuśuṣya haivān tato mriyata ity adhyātmam という文句に関して，古いウパニシャッドにおいては，知識に呪術性が備わっている事実を，わたくしは指摘しなければならない。ウパニシャッドの底流が知識の呪術性なのか，それとも神秘主義なのかは，回避することを許されない問いである。いずれ，この問いに対して，わたくしは答えなければならないであろう。

I, 5, 21 (訳)——さて，これから誓いについての論究がなされる。生類の主プラジャーパティは，感覚器官を創造した。それらは，創造されるや否や，互いに競争した。「わたくしは語ろう」と，言葉は決心した。「わたくしは見よう」と，眼は決心した。「わたくしは聞こう」と，耳は決心した。同様に，他の感覚器官も，それぞれの感覚器官に従って（競争した)。

死は疲労となってそれらを捉え，それらに到達した。それらに到達した後で，死はそれらを閉じ込めた。それゆえ，言葉は疲れる。眼は疲れる。耳は疲れる。しかし，それは中央にある息に到達しなかった。

それら（の感覚器官）は認識し始めた——「動いていても動いていなくても，揺るがず，傷つけられもしないこのものは，実にわれわれにとって最良である。さあ！われわれはすべて，それの現象形態を帯びよう！」と。それらはすべて，これの現象形態を帯びた。それゆえ，これらはこ

れにちなんで「諸生気」と名づけられる。このように知っている人がある家族にいれば，確かに人々はその家族を彼にちなんで名づける。そして，このように知っている人と競争する人は，徐々に衰える。彼は徐々に衰えて，最後に死ぬ。以上，自己に関して。

I, 5, 22——athādhidaivataṃ jvaliṣyāmy evāhaṃ ity agnir dadhre tapsyāmy aham ity ādityo bhāsyāmy aham iti candramā evam anyā devatā yathādaivataṃ sa yathaiṣāṃ prāṇānāṃ madhyamaḥ prāṇa evam etāsāṃ devatānāṃ vāyur mlocanti hy anyā devatā na vāyuḥ saiṣā 'nastamitā devatā yad vāyuḥ ||

I, 5, 22 (訳)——さて，神格に関して。「わたくしは燃え上ろう」と，火は決心した。「わたくしは熱しよう」と，太陽は決心した。「わたくしは輝こう」と，月は決心した。このように他の神格も，それぞれの神格に従って（決心した)。これらの生気のなかの「中央にある息」のように，これらの神格のなかの風も同様である。なぜなら，他の諸神格は休止するが，風はそうではないからである。風は，決して休止しない神格である。

I, 5, 23——athiṣa śloko bhavati yataś codeti sūryo 'stam yatra ca gacchatīti prāṇād vā eṣa udeti prāṇe 'stam eti taṃ devāś cakrire dharmaṃ evādya sa u śva iti yad vā ete 'murhy adhriyanta tad evāpy adya kurvanti | tasmād ekam eva vrataṃ caret prāṇyāc caivāpānyāc ca nen mā pāpmā mṛtyur āpnavad iti yady u caret samāpipayiṣet teno etasyai devatāyai sāyujyaṃ salokatāñ jayati ||

われわれのシュローカの yataś codeti sūryo 'stam yatra ca gacchati という文句に相応するのは，アタルヴァ・ヴェーダ，X, 8, 16 である。アタルヴァ・ヴェーダのこの箇所には yataḥ sūrya udety astaṃ yatra ca gacchati | という文句が見いだされる。カータカ・ウパニシャッド，4, 9 には yataś codeti sūryo 'staṃ yatra ca gacchati | というシュローカが存在する。同じ文句は，ジャイミニーヤ・ブラーフマナ，2, 28 にも見

いだされる。いずれにせよ，わたくしがたった今引用したシュローカに対する注釈が iti 以下の文句 (prāṇād vā eṣa udeti prāṇe 'stam eti) である。スナール，ベートリンク，およびミュラーの諸家は，prānād vā･･･eti を括弧のなかに入れて訳している。

さて，taṃ devāś cakrire *dharmaṃ* という文章に関連して，一言だけ *dharma* に言及したい。ここで taṃ と言われるのは，prāṇa のことである。このことは，文脈から明白である。そしてシャンカラによれば，dharma は prāṇa-vrata, および vāyū-vrata の二つを指す。それゆえ，われわれは taṃ devāś cakrire deharma を「神々はその誓い（風と息の誓い）を遵守した」と訳すことも出来る。いずれにせよ，われわれのシュローカに関する限り，息 (prāṇa) は熱心に求められるべきものである。しかるにスナールは，dharma を訳さないでサンスクリットをそのまま使用し，ベートリンクはそれを dar Gesetz, ミュラーは the law と訳している。ドイッセンは dharma を ein Gelübde と解釈しているように思われる。*Dharma* の概念を確定することは困難である[5]。しかし，ここでは，ダルマは遵守されるべきものとみなされている。

I, 5, 23 (訳)——次のような詩節がある——「それから太陽は昇り，そこへ，それは沈む」と，このように実に，これは息から昇り，息のなかに沈む。神々は，それ（＝息）を法とした。それのみが今日であり，そして明日である。神々が当時決心したことを，今日もまた，彼らは行なう。それゆえ，人は唯一の誓いを遵守すべきである。「悪である死がわたくしに到達しないように！」と考えて，人は息を吸い込み，そして息を吐き出すべきである。もしも彼がそれを遵守するならば，彼はそれを完成させようと欲すべきである。そして，このように知っている人は，それ（誓いの遵守）によってこの神格（＝息）との結合，および（この神格との）同一の世界における居住を獲得する。

I, 6, 1——trayaṃ vā idaṃ nāma rūpaṃ karma teṣāṃ nāmnāṃ vāg ity etad eṣām uktham ato hi sarvāṇi nāmāny uttiṣṭhanti | etad eṣāṃ sāmaitad dhi sarvair nāmabhiḥ samam etad eṣāṃ brahmaitad dhi sarvāṇi nāmāni bibharti ||

ウパニシャッドにおいては，nāman と rūpa は極めて密接な関係にある。しかるに，ここではこの2つに karman を追け加えて，3つ1組という思考方法が表明されている。この3つ1組の思想は，ウパニシャッドを理解する上で決定的に重要である。trayaṃ vā idaṃ nāma rūpaṃ karma を，スナールは Cet univers, en vérité, est une triade: nom, forme, acte と訳した。ドイッセンもまた，この箇所を Dreifach, fürwahr, ist diese Welt: Name, Gestalt und Werk と訳した。しかるにベートリンクは，この箇所を Name, Erscheinungsform und Thätigkeit bilden eine Dreiheit と独訳している。

さて，teṣāṃ nāmnāṃ vāg ity etad eṣām *uktham* という際，uktam は何を意味するのであろうか？ この語は，stuti, stotra śastra を意味する。Uktha は，Lobpreisung あるいは Pezitation を意味すると言っていい。しかし uktha の正しい語源解釈は，*Nirukta* によって与えられている。*Nirukta*, 11, 31 によれば，ukthaṃ vaktavya-praśaṃsanam である。しかし，ここでは uktha の語義が問題なのではない。ここでは *uktha*, および *uttiṣṭhanti* という文の脈絡が問題なのである。シャタパタ・ブラーフマナ，X 5, 2, 20 には，*uktham* iti bahvṛcā eṣa hīdaṃ sarvam *utthāpayati* というテキストが見いだされる。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，5, 13, 1 にも *ukthaṃ* prāṇo vā *ukthaṃ* prāṇo hīdaṃ sarvam *utthāpayati*・・・という文句がある。Uk-tha と ut-thā (Sthā) との関連が注目されるべきである。私見によれば，uk-tha と ut-thā とは語源的には無関係である。しかし，ともかく，われわれのウパニシャッドにおいては，ukta は ut-thā と関係づけられている。そして uktha はリグ・ヴェーダ，sāman はサーマ・ヴェーダ，brahman はヤジュール・ヴェーダに関連している。Sama に関して，シャタパタ・ブラーフマナ，X, 5, 2, 20 には次のような記述がある：sāmeti chandogā etasmin hīdaṃ sarvaṃ samāna. サーマヴィダーナ・ブラーフマナ，I, 1, 13 には sāmyād iti tat sāmnaḥ sāmatvam と述べられている。ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ，I, 12, 5 には tad yad eṣa sarvair lokaiḥ samas tasmād eṣa eva sāma という記述がある。

I, 6, 1 (訳)——実に，これは3つ1組，すなわち，名称，形態，およ

び行為である。それらの名称のなかで，言葉がこれらのもののウクタ (uktha＝讃歌。起源を意味すると想定される) である。なぜなら，すべての名称はこれから生じる (*uttiṣṭhanti*) から。これが，これらのもののサーマン (sāman＝吟唱。等しいことを意味すると想定される) である。なぜなら，これはすべての名称に等しいから。これは，これらのもののブラフマン (brahman. 支えを意味すると想定される) である。なぜなら，これはすべての名称を支えるから。

I, 6, 2——atha rūpāṇāṃ cakṣur ity etad eṣām uktham ato hi sarvāṇi rūpāṇy uttiṣṭhanty etad eṣāṃ sāmaitad dhi sarvai rūpaiḥ samam etad eṣāṃ brahmaitad dhi sarvāṇi rūpāṇi bibharti ||

I, 6, 2 (訳)——次いで，形態のなかで眼が，これらのもののウクタである。なぜなら，すべての形態はこれから生じるから。これが，これらのもののサーマンである。なぜなら，これはすべての形態に等しいから。これは，これらのもののブラフマンである。なぜなら，これはすべての形態を支えるから。

I, 6, 3——atha karmaṇām ātmety etad eṣām uktham ato hi sarvāṇi karmāṇy uttiṣṭhanty etad eṣāṃ sāmaitad dhi sarvaiḥ karmabhiḥ samam etad eṣāṃ brahmaitad dhi sarvāṇi karmāṇi bibharti tad etat trayaṃ sad ekam ayam ātmo ekaḥ sann etad trayaṃ tad etad amṛtaṃ satyena cchannaṃ prāṇo vā amṛtaṃ nāmarūpe satyaṃ tābhyām ayaṃ prāṇaś channaḥ ||

ここで問題になるのは，atha karmaṇām *ātmety* という文句である。シャンカラは，ここの箇所におけるアートマンを身体 (śarīra) と解釈している。シャンカラは，次のように注釈している——ātmanā hi śarīreṇa karma karotīty uktam | シャンカラの注釈に従って，ミュラーはアートマンを Body，ドイッセンは Leib，ヒュームは the Body と訳している。ラダクリシナンもまた，アートマンを身体と訳している。しかるにベートリンクは，アートマンを das Selbst と訳している。スナールはアートマ

ンという語をそのまま保留し，Des actes l *'ātman* est l *'uktha*,･･･ とフランス語訳をしている。スナールは，このアートマンに対する注釈のなかで次のように述べている——*Ātman*, ici, ńest pas exactement ou exclusivement Ie corps; cést l' individualité reálisée と。アートマンを，なぜ，身体と訳さねばならないのか，わたくしは理解に苦しむ。アートマンは，身体ではなく，「自己」を意味する。この自己は，現象形態から異なった究極的実在である必要はない。自己は現象形態の背後に隠されていなければならないというのは，カントのアイディアである。しかし，われわれが今扱っている箇所においては，アートマンは決してカント的に解釈されるべきではない。ここのアートマンは，決して現象の背後にある本質ではない。われわれが問題にしているアートマンは，みずから現象するところの存在である。すでに，われわれのウパニシャッド，1, 5, 3 において，われわれは etanmayo vā ayam ātmā vāṅ-mayo mano-mayaḥ prāṇa-mayaḥ という思想に接している。ここにおいてもまた，アートマンは決して現象の背後にある究極的実在ではなく，言葉，心，および息の 3 つの機能から構成されている現象形態であることが確認されたている。Tat etat trayaṃ sad ekam ayam ātmā ekaḥ sann etad trayam——この文句は，われわれが今扱っているアートマンが3つ1組であって，しかも 1 つであるものとして解釈されていることは明らかである。ここで traya (3つ1組) と呼ばれるものは名称，形態，および行為である。そして，この3つ1組は無造作にアートマンであると言われる。この世において名づけられるもの，および現象形態，そして日常的な行為ないし活動——これらは，すべて現象である。そして，この3つ1組はアートマンであり，この1つであるアートマンは名称・形態・行為にほかならない。アートマンがウパニシャッドにおいて常に現象の背後に存在する物自体，あるいは究極的な実在を意味するというカント的な通説を，今や，われわれは放棄しなければならない[6]。

I, 6, 3 (訳)——次いで，行為のなかで自己 (アートマン) が，これらのもののウクタである。なぜなら，すべての行為はこれから生じるから。これが，これらのものののサーマンである。なぜなら，これはすべての行為と等しいから。これは，これらのもののブラフマンである。なぜなら，

これはすべての行為を支えるから。

これは，たとい 3 つ 1 組ではあっても，一つであり，この自己（アートマン）である。そして自己（アートマン）は，たとい1つではあっても，この3つ1組である。これは，真実によって覆われた不死である。実に，不死は息である。真実は，名称と形態である。この息は，これらの2つによって覆われている。

要　　約

I, 5, 1—13。最初に，謎の詩節（śloka）がある。そして，これに対して，注釈が施される。生類の父は7種類の食物を生み出す。創造者としての父は，1つを全生類のために，2つを神々のために，1つを家畜のために，3つを自己自身のために創造した。父が自己自身のために創造した物は，言葉，心，および息である（1—3）。

言葉，心，および息の3つからアートマンは構成されている。つまり，アートマンは現象形態の背後に隠されている究極的実在ではなく，現象形態そのものである（4—13）。

I, 5, 14—15。生類の父プラジャーパティには，16 の部分がある。彼の第 16 の部分が，アートマンである。このアートマンは，（車輪の）こしきである。このアートマンは永続的なものであり，不滅である。それゆえ，このように知っている人は，たとい一切を失っても，アートマンによって生きる。

I, 5, 16。ここでは三界，およびそれらを獲得する仕方が述べられている。

I, 5, 17—20。息子に対する父の遺贈（*saṃpratti*）が，ここでは問題になっている。父が自己の息子に自己の感覚器官を遺贈した後に，大地，天，および水中から，息子のなかに神的な言葉，心，および息が入る。そして，このように知っている人は，すべての生類のアートマンになり，彼らにとって，生類の悲しみは無縁である。しかし，20 において説かれるアートマンは，神的な息と実質的に同一である。

I, 5, 21—23。Vrata-mīmāṃsā において説かれているのは，神的な息である。「誓いの論究」は，われわれにヨーガの技術を思い出させる。言葉，眼，および耳が疲労して死に捉えられるのに対して，神的な息，あるいは中央にある息は疲労することもなければ，死ぬこともない。風が休止

することがないように，自己に関しては息は衰えることもなく，休止することもない。この神的な息は，実質的にはアートマンとみなされる。

I, 6, 1—3。ここの箇所で，われわれは極めて注目に値する思想に出会う。全世界は，ただ1つであるアートマン（自己）の3重の現象である。アートマンは現象形態の背後に隠されている存在ではなく，みずから現象する存在である！，ここでも，アートマンは実質的には神的な息である。アートマンは不死である。アートマンは，たとい1つであっても，3つ1組 (traya) である。アートマンと現象形態の間に何の差別もないことを，ここの箇所の作者はわれわれに教える。アートマンそのものが，そのまま現象するという思想が，ここでは見いだされる。

注

1) ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラフマナ，III, 14, 9: vāg ity asmā uttareṇa 'kṣareṇa candramasam annādyam akṣitim prayacchati.
2) Hermann Oldenberg, *Die Religion des Veda*, 1917, p. 526.
3) シャンカラは五気について次のように注釈している——atha prāṇa ucyate ——prāṇo mukha-nāsikā-sañcāryā hṛdaya-vṛttiḥ praṇayanāt prāṇaḥ | apanayanān mūtra-purīṣāder apāno 'dhovṛttir ā nābhi-sthānaḥ | vyāno vyāyamanakarmā vyānaḥ prāṇāpānayoḥ sandhir vīryavatkarma-hetuś ca | udāna utkarṣordhvagamanādihetur ā pādatala-mastaka-sthāna ūrdhva-vṛttiḥ | samānaḥ samaṃ nayanād bhktasya pītasya ca koṣṭhā-sthāno 'nnapaktā | ana ity eṣām vṛtti-viśeṣāṇāṃ sāmānyabhūtā sāmānyadeha-ceṣṭābbisaṃbandhinī vṛttiḥ | evaṃ yathoktaṃ prāṇādi-vṛtti-jātam etat prāṇa eva |
4) ベートリンク版によれば，次の通りである: pitā mātā prajaita eva | mana eva pitā | vāṅ mātā | prāṇaḥ prajā || (I, 5, 14)。われわれは，次のように訂正してもよい——mātā pitā prajaita eva····古代インドにおいては，mātā pitā····という順序の方が，むしろ普通である。しかし，だからといって，女性が古代インドにおいて優遇されていたわけではない。
5) ウパニシャッドにおいては，ダルマは中心的なテーマではない。初期仏教においては，ダルマ（パーリ語ではダンマ）は，中心的な概念である。われわれが扱っている箇所においては，ダルマは全然説明されていない。
6) もちろん，ウパニシャッドにおいては，究極的実在としてのアートマンは容認されている。しかし，アートマンは例外なく究極的実在を意味するという考えは正しくない。ウパニシャッドには，統一的な哲学は存在しない。われわれは，この哲学的小冊子のなかに，個別的な諸見解を見いだすのみである。そして，アートマンの語源も明らかではない。われわれが扱っている箇所に関する限り，アートマンと息との密接な関係は否定されない。ここにおいては，アートマンはおそらく息に由来すると推定してもよいであろう。し

かし，他の箇所に関しても常に，そうであるというわけではない。アートマンという語について言語学的な結論を下す前に，われわれは個々のテキストの部分を十分に検討しなければならない。